

# 後水尾院述・近衛基熙記『法皇御説聞書』攷

大 谷 俊 太

一

陽明文庫一般文書中の歌道聞書、『法皇御説聞書』（仮綴写本一冊、一般文書6158）を紹介する。「法皇」とは、すなわち後水尾院のこと、筆記者は近衛基熙である。後水尾院述・近衛基熙記の歌道聞書としては、既に紹介した『御手扣』がある（「後水尾院・後西院述、近衛基熙記、諸道聞書『御手扣』解題と翻刻」、『女子大國文』一五〇、平成二十四年一月）。墨付僅か三丁、項目数にして三十と分量は少ないものの、本書も、後水尾院から直接親しく教えを受けた当人による自筆の聞書である点、資料的価値は『御手扣』ほかの後水尾院からの聞書類に劣るものではない。

本書は、その聞書時期が特定される。端作りには「寛文六三六 法皇御説聞書」とあり、寛文六年（1666）三月十六日から記し初められていることがわかる。第三丁表の24項目には「寛文六九月九日 従内々進上詠草」とあり、同年の重陽の記事が載る。その後にはやや行を空けて四項目が記されているのは、九月九日以降の書留であろうが、一つ書きでは二つ分であり、後述のように、一時に書かれたとも考えられる。いずれにせよ、本書は寛文六年中に記し留められたものとしてよいであろう。

寛文六年には、後水尾院は七十一歳、近衛基熙は十九歳である。同じく後水尾院からの聞書のうち、『御手扣』は天和末年から貞享初年にまとめられたもので、記事の内容も延宝期以降のものと思われる。筆記者が靈元天皇の『麓木鈔』は書中に寛文八年正月十九日の和歌と寛文十二年二月二十五日の記事が確認できる。同じく靈元天皇記の『聴賀喜』は延宝五年正月八日から三月二十五日までの聞書。従って、上記三種の聞書よりは、本書が先行する。『飛鳥井雅章卿聞書』には寛文二年から同九年、日野弘資による『後水尾院御仰和歌聞書』には寛文三年から同六年十一月六日の記事が載り、本書と時期が重なるが、寛文六年には雅章五十六歳、弘資五十歳で、兩人とも既に古今伝受を受けている。それに対して本書は、基熙十九歳の聞書で、歌道の到達度に違いがあり、同席しての記事の重なりも見られない。

## 二

さて、その内容は、前半は新古今集の春上下部の和歌十五首についての注である。新古今集における歌番号を挙げれば左の通りである。

8・11・20・21・28・36・38・47・58・62・78・101・114・134・151

本書の8項目目（新古今集47番歌の注）の次に、

右、法皇御抄之趣ナリ。直写留ナリ

とあり、1～8項目の記事が「法皇御抄」の写しであるとする。「法皇御抄」が新古今集の注とは限らないが、後水尾院に新古今集の注釈があるとの報告はこれまでになされていない。本書13項目（新古今集114番歌の注）の終わりには

私云、狩ノ字之事、法皇詠哥大概御抄ニクワシク被遊シナリ。可見也。

とあり、後水尾院の『詠歌大概御抄』の名が見える。が、上記新古今集歌十五首のうち、詠歌大概所収歌はこの114番歌のみである。また、「狩」についての説明を『詠歌大概御抄』に譲ったとあるので、「法皇御抄」は『詠歌大概御抄』のこととは考えられない。

14項目の新古今134番歌の注釈を記した後にも、

右御抄。

とあり、その14項目を受けて、15項目の最初に、

此哥ノツキデニタレヤラウカ、ハレシトナリ。同法皇御抄。

とあって、三条西実隆の「人ハイサ秋ノ月ニヤ花ノ露モヲキ所ナキ心ミエマシ」（雪玉集卷四・1197・翫月。雪玉集では、結句が「心みゆらん」）についての解釈を記し、

如御抄、不違之写。

とあるので、「法皇御抄」は講釈の場で「ついでに」話されたことも書き留められた講釈聞書であるらしい。

以上から、寛文六年以前に、新古今集の少なくとも春部については、後水尾院による講釈が行われ、その聞書がまとめられていたことが予想されることになる。本書の1～15項目はその「法皇御抄」に基づく聞書であった。

## 三

次に、16項目は、新古今集151番歌、大伴家持の「唐人の船をうかべてあそぶてふけふぞわがせこ花かづらせよ」の「花かづら」から「かざし」の考証に入り、後撰集春下96の「かざせども」と後撰集恋1202「かざすとも」の歌に言及するもので、これも同じ新古今集歌講釈の記事であったかもしれないが、15項目までのように「御抄」の写しとは記されていない。17項目は古今集春下95「いざけふは春の山邊にまじりなむくれなばなげの花のかげかは」の「なげ」、18項目は後撰集雜四1300「いまはとて秋はてられし身なれどもきりたち人をえやはわするる」の「きりたち」について記す。19項目は拾遺愚草初学百首10「花ゆゑに春はうき世ぞおしまるる同じ山路にふみまよへども」の解釈がなされ、20項目には「みしぶつき」「そそや」「よすが」「めかる」「はた」「いかに」の語の意味が簡略に記される。

17・19・21項目には直接新古今集との関連が見られないが、「みしぶつき」は新古今集301の俊成の歌「みしぶつきうゑし山田にひたはへて又袖ぬらす秋は来にけり」中の語であり、「よすが」には良経の「ふかくさの露のよすがを契にてさとをばかれず秋は来にけり」（新古今集293）、あるいは寂蓮の「ひとめみし野辺のけしきはうらがれて露のよすがにやどる月かな」（新古今集488）がある。「はた」「いかに」が一首中に用いられている歌に、具平親王の「ゆふぐれは萩吹く風のおとまさるいまはたいかにねざめせられむ」（新古今集303）があり、同じ意味合いの「いかに」が使われている例歌として掲げられている「ふしておもひおきてながむる春雨に花の下ひもいかにとくらん」も新古今集84番歌である。

従って、16・23項目部分もほぼ新古今集講釈と何らかの形で関わって記し留められた可能性がある。十九歳の基熙は、この寛文六年当時、和歌の初学期を過ぎ、新古今集を学んでいたと思しい。

## 四

さらに、24項目の前に「寛文六九月九日 従内々進上詠草」とあるので、24～26項目は、寛文六年の禁中重陽歌会に提出する詠草の後水尾院による添削・批評の記録である。早春霞・静見花・野時鳥の三首は、陽明文庫所蔵の基熙の家集、『応円満院殿御詠歌』に、早春霞・野時鳥は添削後の形で、静見花はそのままの形で、収められているので、確かに基熙の詠歌であると確認できる。

27～30項目は、四項目に分けて番号を振っているが、27項目の順徳院百首の「清見濁雲もまがはぬ波の上に月のくまなるむら千鳥かな」の歌の「まがはぬ」に関わって、28・29項目の続古今と後撰の歌が導き出されているのであろうし、30項目の「哉ドマリ」すなわち「てには伝授」の記事も、順徳院の歌のときの「かな（哉）」に関わっての発言であろうと思われる。つまり、この四項目の記事は、後水尾院と基熙の一度の対話で交わされた内容であると推測されるのである。

「まがはぬ」から「まがふ」を用いた和歌の例を挙げ、類義語の「かどふ」を用いた例も引き出す。一方、28項目では、もとの順徳院の和歌から離れて、「まがふ」の例歌として挙げた続古今の和歌を踏まえた三条西実隆の詠歌に触れ、詠歌の新しい趣向のしつらえ方に言及する。24～26項目の歌会歌の添削の場合もそうであるが、単に和歌一首を添削したり、意味を取って終わりなのではなく、そこから、実際の詠歌行為に役立つような、具体的に実践的な指導が行われていることが看取される。

以上、本書は小品ながら、後水尾院の歌学指導の実態を示す第一次資料として有意義と考え、以下に私の翻刻を示す。

## (凡例)

- 一、翻字は原則として原本表記の通りとする。
- 一、各項目の頭に番号を振った。
- 一、掲出の和歌については所収歌集と新編国歌大観番号を略記した。
- 一、旧字体・異体字・合字は通行の字体に改めた。
- 一、句読点・並列点を施し、清濁を分かった。
- 一、見せ消ち・挿入等は訂正後の形を示した。
- 一、その他、私の注記事項は（ ）で示した。

## 『法皇御説聞書』（一般文書61518）

写本。仮綴。一冊。縦二八〇糎・横二〇・五糎。楮紙。表紙なし。墨付三丁。遊紙、後に二丁。



1 新古今

読人しらず 風ませに雪はふりつゝ、しかすがに霞たなびき春はきにけり (新古今8)

・しかすがはサスガニナリ。

2 山邊赤人 あすからはわかまつまんとしめしのに昨日もけふも雪はふりつゝ、 (新古今11)

・しめしは領ズル也。占<sup>シム</sup>ノ字。

3 家持 卷向のひばらもいまだくもらねば小松が原にあは雪ぞふる (新古今20)

——ハ檜原ノ枕コトバナリ。檜原ハクモル物ニヨミツケタリ。カゲノクラキユヘニ、カクイヘルカ。

4 よみ人しらず 今さらに雪ふらめやもかげろふのもゆる春日となりにしものを (新古今21)

・やもハハノ心ナリ。ハトイヘバ句ガノブルユヘニ、モトイヘリ。

5 源重之 梅がえにもうきほどにちる雪を花ともいはじ春の名だてに (新古今28)

・雪ノフリテ花ノタメニハモノウキホドニ、ナカク花トモイハジ也。

・雪ユヘニ花ノヲソキガモノウキナリ。

6 太上天皇 見わたせば山もとかすむみなせ河夕べは秋と何おもひけん (新古今36)

・夕ハ秋ガヲモシロキモノナルニ、トヲボシタレバ、此山モト霞ムミナセ川ノ夕ノ景気モヲモシロクヲボスナリ。秋

バカリノ夕ニテハナシトノ心ナリ。

・只ウキトモナシニ夕ノヲモシロク感情フカキ時ナリ。

7 定家 春のよの夢のうきはしとだへして峯にわかるゝよこ雲の空 (新古今38)

・夢ノウキハシハ、タゞ夢ノコトナリ。

8 俊成女 梅の花あかぬ色かもむかしにておなじかたみの春のよの月（新古今47）

・諸共ニアカズ見シ梅ノ色香モムシニ成テ、月ヤアラヌ春ヤ昔ノトウラミタル月ト同ジ記念ニ残ルバカリニテアルヨ、ト全篇西ノ対ノ心ニ成テ読タル心歟。

右、法皇御抄之趣ナリ。直写留ナリ。

9 寂蓮 今はとてたのむのかりもうち侘ぬおぼる月夜のあけぼの、空（新古今58）

・今はとてハ、雁ノ思ヒタツナリ。たのむハ田面ノコトナリ。

10 撰政太政大臣 帰る雁今はの心ありあけに月と花との名こそおしけれ（新古今62）

・雁ニミステラル、月ト花トノ名ガラシキト云心ナリ。

11 壬生忠見 やかずとも草はもえなん春日のはたゞ春の日にまかせたらなん（新古今78）

・上ノナンハ、ヤガテモモヘイデズルナリ。下ノナンハ、マカセヨト下知ノナンナリ。

12 式子内親王 はかなくて過にしかたをかぞふれば花に物おもふ春ぞへにける（新古今101）

・ナニトモナク、ワヅカノ間ノヤウニ思ヒシニ、カゾフレバ、サクヤマチ、ルヲ、シミテ、花ユヘ物ヲ思ヒテ数夜ノ春ヲ過シトナリ。

13 俊成 又やみむかたの、みの、桜がりはなの雪ちる春のあけぼの（新古今114）

・狩トイフ字ノ心ハ、物ヲ、ウ心ナリ。鷹狩ナドモ民ノワヅラヒニナルユヘ、イネラクラフ鳥ヲタカニテヲヒシナリ。末ノヨニナリテ、遊興ニハナリタリ。ソレヨリタカバリト云。狩ノ字ノ心ハタカカラスヘテ、鳥ヲタヅネモトムルナリ。

此桜狩モ尋求ル心ナリ。茸ガリ・紅葉ガリナドモ同ジ心ナリ。

・私云、狩ノ字之事、法皇詠哥大概御抄ニクワシク被遊シナリ。可見也。

14 定家 桜色の庭の春風あともなしとはゞぞ人の雪トグニみむ（新古今134）

・花ヲサソフ春風ハ桜色也。庭ノ面ニ花散滿テ、人ノ踏分タル跡モナキ也。尤、花ノ後、問人モナケレバ也。此花ヲフミ分テ、若問人モアラバ雪ニトハル、心チシテ、散シキタル花ヲ雪トナリトモ見テナグサムベキノ心歎。トハッゾ人ノハ、人ノトハッゾノ心歎。右御抄也。

15 此哥ノツキデニタレヤラウカハレシトナリ。同法皇御抄。

遣遥院 人ハイサ秋ノ月ニヤ花ノ露モヲキ所ナキ心ミエマシ（雪玉集1197）

・心ヲ置ト云ニハアマタノ心アル歎。露ナラヌ心ヲ花ニヲキ初テ（古今589）ト云ハ、心ヲトメタル心歎。是モ其心歎。花ニ小心トマル事モナキ事ハ、秋ノ月エミユベキト、サシモアク事ナキハ、花ニモ秋ノ月ユハハ心ヲトメ置マジキ也。人ハシラズ、我ハ月ニ其心ミエント云歎。月ヲヒトヘニ翫心歎。

如御抄、不違之写。

16 家持 唐人の船をうかべてあそぶてふけふぞわがせこ花かづらせよ（新古今151）

・花かづらハ、カザシナドノ事ナリ。カザシノコト、昔ハ物ヲカクスコトニイヘルヲ、後ハハヨソホヒノヤウニナレリ。源氏物語ニモ、かざしの紅葉いとふちりすきてナド紅葉ノガノマキニアリ。コレモヨソホヒノコ、ロナリ。後撰、春下

延喜御時殿上のおのこどものなかにめしあげられて、をのくかざしさしけるつるでに

凡河内躬恒

かざせどもおひもかくれぬこの春ぞ花のおもてはふせつべらなり（後撰96）

かざせどもハカクスコ、ロナリ。假令扇ナドヲ人ニミエラレジトカザスモカクスナリ。花のおもてはふせつとは、花ノタメニ俗ニイフツラヨゴシナドイフ心ナリ。源氏は、きゞの巻にも、おもてぶせにやなどあり。面目ナキ心ナリ。畢竟ノ心ハ、花ヲカザセドモ、老モカクレズ。カヘリテハ花ノタメニハ面目モナキヤウニナルコ、ロナリ。後撰、恋

しぞくハ親族也。イヒサハゲハ、イヒワケヲ人ニシテクレヨト云事也。  
しぞくに侍りける女の、おとこになたちて、かゝる事なんある、人にいひさはげといひ侍ければ、  
貫之

かざすとも立とたちなんなき名をばことなし草のかひやなからん（後撰1202）

かざすともモカクストモナリ。立トタチナントイフハ、俗ニタチニタツテナドイフ類也。コトゞシクイヒナスナリ。コトナシ草ハ無事ニスルコトナリ。コトナシニセントスルカヒヤナカランノ心ナリ。草ハ、ツケ字ナリ。コトグサナドイフ類ナリ。

17 一、なけ。なけ。二条家説 冷泉家説

いさ今日は春の山べに——（古今95）なけハ、アルマイ花ノカゲカハ、トイフ心ナリ。

18 後撰、恋 よみ人しらず

いまはとて秋はてられし身なれどもきりたち人をえやはわする、（後撰1300）  
きりたちハ、切断也。心ハ人ニハアキハテラレシワガ身ナレドモ、我ハ切断シテ人ヲワスル、事ハナリガタキト云心也。

19 定家 花ゆへに春はうき世ぞおしまる、同じ山路にふみまよへども（拾遺愚草10）

此哥ハイマダ世ヲノガレズシテノ事也。オシマル、トイフノハ、山ニイラント思ヘドモ、花ユヘニ、春ガオシマ

ル、心也。おなじ山路ハ、四氣ともに山ニイラン、ト思ヘドモ、春ハ花ユヘニ、ウキヨガオシマル、トナリ。

20 一、ミシブツキハ、水シブツキ也。水ノサビ也。ヅキハ、アブラツキナドノ類也。

21 一、ソッヤハ、スハヤナリ。

22 一、よすがは、たよりなり。めかる、ハ、離也。目カレヌハ、目不離也。

23 一、はたハ、将也。マサニノ心也。いかにハ、何ホドカノ心なり。

ふして思ひおきてながむる春雨に花のしたひもいかにとくらん（新古今84）

コノイカニナドモ、ナニホドカノ心ナリ。

24 寛文六九月九日、従内々進上詠草。

早春霞 春はまだ朝け寒ゆく雪げだにおなじひかりの色にかすめる

仰云、寒ゆく<sup>レ</sup>の行ノ字ハ、冬フカクナリ行ナドモノ、サキヘユクナリ。春ナドノ雪ゲニサヘ行ナドハイハレズ。タゞ行ノ字ハ、コトバタラヌユヘニ、イレタルヤウナリ。又、雪ゲダニノダニコトバ、サダメテサヘノコ、ロニヨミツラン。コ、ニハ、タ、サヘトヲキタル、ヨキナリ。コレハ、チトシサイアリテ、自然トガテンノユクコトナリ。口ニテハイヒニクキコト也。又、おなじ光のトハ、光ハ何ノ光ノヨシ、御尋ナリ。此ヒカリハ、霞ノヒカリノヨシ申。答、イカニモ霞光ナドツゞケツレドモ、雪ゲニハ、ヒカリナドアルベキヤウナシ。ヒカリハ、日ノコトニモ用來ル間、センナキナリ。 御添削

春はまだ寒き朝の雪もよに曇もかすむ色やそふらん

雪モヨニハ、雪モヨヲシニ、ナリ。曇ヤ霞ム色ヲソフラントイヒテモナレドモ、キレ字ノヤハランニ、ナルホドチカキガヨキナリ。

25

静見花 おもほえずわが身はいかに色もなき心を花のうへにうつして

コノ哥ハ、一句／＼ミナツマリタル句ニテワロシ。サテ、コレハ花ニ着シタルバカリニテ静ナルノコ、ロナシ。閑ニ居テ、花ヲ見ルコ、ロナリ。又、閑居トハマギレヌヤウヨムベキ也。コノ哥ハヨミナラスベシ。無御添削。  
〔題ニ花トイフニテ、桜トハヨムベシ。コレハ花ハ何花モアルユヘ、ヒロシ。桜トイフ題ニテ、花トバカリハヨマヌナリ。セバキユヘナリ。山峯ナドモ皆此類ナリ〕（頭に書入れ）

26

野時鳥 道もなき野べをきにけり時鳥ひとこゑ過しこゝろづくしに

此哥ハ、野モ時鳥モセンガキコヘタレドモ、心ヅクシハ一所ニキテトカカウカナド心ヲツクスナリ。御添削

道モナキ野モワケツベシホト、ギスナキユクカタヲシタフアマリニ

サテ、シタフハ、忍ぶトヲナジ事ナリ。サレドモ、昔アリタル事ナドヲバ、シタフトハイハズ。忍ブトイフナリ。シタフハ現在ニアリタル事ヲシタフナリ。人ノ行ヲ師ニシテ、其躰ヲシタフナドノ類ナリ。仮令シタフトハ、サキヘユクモノヲトムルコ、ロナリ。

27

一、清見濁雲モマガハヌ波ノ上ニ月ノクマナル村千鳥カナ（順徳院百首61）

マガハヌハ、雲モマガハサヌナリ。

28

続古 サラデダニソレカトマガフ山ノ端ノ有明ノ月ニフレルシラ雪 前大納言為家（続古今68）

ヲキイツル袖ニタマラヌ雪ナラバ有明ノ月トミテヤ過マシ 逍遙院（再昌草488）

マヘノ哥ヲスコシノ用ヤウニテ如此アタラシキヤウナリ。

29

後撰 山風ノ花ノカ、ドウフモトニハ春ノ霞ゾホダシナリケル（後撰73）

カドウトハ、カドハカスナリ。古キ哥ニハ、カドハカスナドイフ所ニ、カドフトバカリモアリ。マガハヌモ、マギラカサストイフトコロニ、マガハヌトバカリモアルナリ。

30

一、哉ドマリハ、伝授ナクテハヨマヌコトナリ。

**【付記】**

資料の閲覧・翻刻を御許可戴きました陽明文庫長名和修氏に、記して感謝致します。